# 図書館だより

第32号 令和6年3月発行



大島商船高等専門学校図書館 山口県大島郡周防大島町大字小松1091番地1

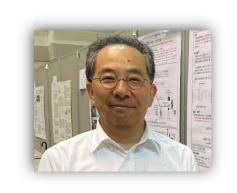
### 目 次

巻頭言							
「シソーラス」と豊かな思考	図書館長	浅川	貴史	1			
第21回読書感想文コンクール優秀作品発表							
最優秀賞							
これまでの軌跡、これからの歩み	情報工学科2年	倉増	凪紗	2			
優 秀 賞							
明日が来るという幸せ	商船学科2年	横山	琳子	3			
『AI は人類を駆逐するのか?』から学ぶこれか	商船学科1年	村尾	虹大	4			
らの生き方							
佳 作							
思考する	情報工学科3年	小松	咲絵	5			
『「どうせ無理」と思っている君へ』を読んで	情報工学科3年	河村	菜々	6			
新人類との共生	電子機械工学科2年	古田	飛匠	7			
明日	商船学科1年	小田志	芯乃介	8			
第3回読書ラリー優秀者発表				9			
推薦図書							
トコトンやさしい自動車エンジンの本	商船学科	寺田	将也	10			
紛争地の看護師	一般科目	吉積	侑莉	11			
ブックハンティングに参加して				12			
図書館と出会う読書活動「ライぶらり」実践サポート校の取組							
図書館利用状況				16			

※表紙写真:第21回読書感想文コンクール表彰式(校長室にて)

### 巻頭言

#### 「シソーラス」と豊かな思考



図書館長・図書館司書 浅川 貴史

皆さんはインターネット検索を使ったことがありますか。現代社会においては、辞書や専門書などの文献検索だけでなく、Google などの商業ベースのものや、J-Global や CiNii(サイニと読みます)などの学術検索、さらに e-Gov などの日本政府のワンストップ検索などがインターネットを通じた検索に広く使われるようになりました。では、今あなたが自動運転の車について調べようとしたとき、何をキーワードにしますか。「自動運転車」、「自律制御車」、「AI制御車」などなど、Google などの商業ベースの検索エンジンでは、検索語からの連想に生成 AI を使い精度を上げる努力をしていますが、研究のための論文検索には専門的な用語を使うため、なかなかヒット率が上がりません。そのため JST(国立研究開発法人科学技術振興機構)では、JST 科学技術用語シソーラスを作成し、J-DreamIIIという有償検索サイト(本校図書館で使用できます)で、研究分野での検索をサポートしています。

おっとっと、シソーラスの説明を忘れていました。詳しくはインターネット検索してもらうとして、簡単には類似語をうまくまとめたものです。「車」「自動車」「カー」を同一のものとして捉えるというものです。さらに「自動車」の下には「普通車」「バス」「トラック」などが関連語として紐づけられています。便利ですね。そのため、図書館にはシソーラスの辞典などというものもあります。私はときどきこの辞典を見て遊んでいるのですが、ひとつのものをいろいろな言葉で表現できる面白さは、小説以上かもしれません。シソーラスと似たものに俳句などの「季語」があります。こんなものが「季語」なのと思うこともありますが、俳句で表現している状況を思い描くと、なるほどと感嘆してしまいます。一方、現代社会では、とかく画一的なものの見方や表現を押し付けてくる場面も多いものです。しかし、多様性の時代といわれる時代だからこそ、ひとつのものを個々人の感性で表現し、それを尊重し合うという豊かな思考も必要なのではないでしょうか。そう考えると「語」の生まれた経緯や背景、使われる場面などを考えながらの類似語探しも風情なものです。皆さんが検索エンジンや生成 AI を使うとき、単なる簡単便利ツールとしてではなく、シソーラスについても考えつつ、自分だけの個性的な結果を導ける技術を身に付けたいですね。ちなみにこの文章は生成TAKASHI(非人工脳)によるものです。



## これまので軌跡、これからの歩み

『AIは人類を駆逐するのか?』 太田 裕朗 著 幻冬舎 情報工学科2年 倉増 凪紗

#### 「AIに仕事を奪われる」

私が十歳の頃、二分の一成人式に向けて様々な職業を調べていた時に目にした文言である。その頃は今の様にAIを手軽に利用する機会など殆ど無かったものだから、AIという未知の存在に対し、敵意の様な、恐怖の様な、なんとも形容し難い感情を抱いたものである。

本書『AIは人類を駆逐するのか?』を目にした際、そんな稚い出来事をふと思い出し、本書を購入するに至った。今となっては其処彼処で触れるようになったAIという技術について改めて肯定面と否定面を振り返ることで、将来への展望を広げようといった所存である。

本書において著者は、自動ドアや自動ブレーキなどの現在のAIによる自動化の延長に、「自律世界」が誕生すると始めに提起する。AIが「他者からの支配を受けず自分が持つ規律に従って行動する」時代が訪れるだろうと。タイトルの「駆逐」とは、人類の知能を超えたAIの判断を我々は理解することができず、人類が滅ぶ結末を迎えるかもしれない、というSF映画のような次代の「可能性」を案じている。

私は本書を読む前は、表紙とタイトルのイメージでAIへの漠然とした不安を煽るような暗い文章だと考えていたが、読み進めていくと、著者はAIは便利な道具ではなく、人類を上回る性能を秘めた「知的生物」に成り得ると評価し、然しそのAIの自律が豊かで魅力ある社会をもたらす可能性があると、肯定的に捉えていた。

私が本書で印象に残ったのは、「AIによって人間はどうなるのかではなく、私たちはどうなりたいのか」という言葉だ。理由は、始めに述べた「AIに仕事を奪われる」とは、この言葉の前者に当たるのだと思ったからだ。これを受けて、進化するAIへのネガティブなイメージは、私達がAIに対し何処か受動的であったからなのだと考えた。AIに翻弄されるのではなく、AIと共に歩む為には、「私たちはどうなりたいのか」と未来を思い描き、それを実現する方法を、他でもないAIと共に探求する必要があるのではないだろうか。

著者は本書を通して、AIに「何をどこまで教えるか」が需要であると主張した。確かにAIに 人間の倫理観や行動規範を教えることで、人間とAIの価値観は調和し、共存への大きな一手となるだろう。然しここで疑問に思ったのが、どんな道具も使う人次第、ということである。原子力然り、遺伝子操作然り、新しい技術とは、利用する目的や状況によって一長一短といえる。それはAIも例外ではない。例えばAIを使った自動運転技術は、人為的な過失による事故を減少させたり、老齢者や障碍者など、運転が困難な人々の助けになったりする。一方で、その技術が自爆テロなど、悪意を持って利用される危険性も孕んでいる。詰まり、AIが自律判断ができるようになっても、人間側がそれを悪用する可能性は排除し切れない。また、本書で取り上げられていたドローンも、日本では過疎地域への配送の手段として実用化されつつある一方で、今戦闘が起きているロシアとウクライナでは軍事用ドローンが飛び交っていると報道されていた。人々の生活を豊かなものにする反面、使い方によっては大勢の人を容易に殺す手段になるということである。

そのような事態を少しでも減らすために、AIの発展と同時に我々人間も進化していく必要があるのではないだろうか。自律するAIは最早「便利」という言葉一つでは片付けられない程人間に大きな恩恵を与えるだろう。然しその反面、高次化したAIが人間社会に及ぼす影響は、技術だけでなく、道徳や法律など多岐に亘る。AIと人類、お互いが良き隣人であるために、我々はそれらの変化に適応しなければならない。

「第三次世界大戦は四時間で終結する。」

以前何処かの記事で目にし、衝撃を受けた文である。核兵器とはそれほど人間の手に余るということではないだろうか。AIも同じ未来を辿るかもしれない。便利という言葉で終わらせず、AIの得意なことや、苦手なこと、利用に伴う責任など、その本質を理解しようと努める姿勢こそが、人類とAIが新たな時代を迎えるにあたり、我々が希求すべき事ではないだろうか。



# 明日が来るという幸せ

『明日』 井上 光晴 著 集英社文庫 商船学科2年 横山 琳子

私がこの本を手に取ったきっかけは、本のタイトルである「明日」という二文字が目に止まったからです。本のタイトルにも関らずたった二文字のシンプルなタイトル。それを見て、私は楽しいことか悲しいことか明日は何かあったのか気になると同時に、この二文字に込められた思いはどんなものだろうかと疑問に思い、この本を手に取りました。

しかし、いざ本を開いてみると私が想像していた内容とは遥かに違っていました。私は本のタイトルである「明日」についてこんな日だ、という話が書かれてあると思っていたのです。ですが予想とは違い、この本は明日一九四五年八月九日に原爆が落とされることを知らない長崎の人々の前日の生活が淡々と書かれていました。そこでは、戦時中ではあるものの、町に住む一人一人がごく普通であたり前の暮らしをしていました。婚礼の宴を喜ぶ人々や、戦争で家を離れた夫をまっている女性など。それぞれの人がうれしい思いや悲しい思い、様々な思いを抱えながら色々な事をして、今の私達と同じようにごく普通であたり前の生活をし一日を送っていました。そのため、

「先日、広島県で新しい新型爆弾が落とされたんだって。」

とまるで人事のように話している人々もいました。まさか、明日自分達が過ごしている長崎に爆弾が落とされるなど、誰も考えていなかったからです。だからこそ、長崎の人々の「明日」を知ってしまっている私にとっては幸せな日々を過ごしている人々の明日を思うととても胸が苦しかったです。

この本を読み進めると同時にどこか読みづらさを感じることが多くありました。長崎弁や昔の言葉など私が普段耳にしない言葉が使われているからです。しかし、返ってこのことがリアリティを生み、より私をこの本に引き込んである種、生々しさを感じながら長崎の人々の感情や生活を感じとることがありました。

私はこの本で印象に強く残った言葉があります。それは、

「人間は私の父や母のように霧のごとく消されてしまってよいのだようか。」

という女性の言葉です。この本では最後、この言葉を残した女性が陣痛に苦しみながら一つの命を生み出す出産シーンが書かれています。長崎の原爆では、人口が二十四万人いる中で七万四千人もの命が一つの原爆の存在によって霧のごとく消されてしまったのです。女性の父や母も消えてしまった命の一つでした。強い悲しみ、辛さを経験した女性が残した言葉だからこそ心が揺さぶられて、私の中でとても強く印象に残りました。また、原爆が落とされて不自由な環境の中で苦しみながら一つの命を必死に生み出そうとする女性の姿を見て、命というものはどれだけ尊く、大切で重たいものなのかを考えさせられました。そんな「命」という儚いものをたった一瞬にしてたくさん消してしまった原爆。これから先、絶対にもう一度起こしてはいけないと改めてこのシーンで強く感じることができました。

人の一生の終わり。それは、それぞれ必ず違うものであると思うし、そうでなければならないと 思います。原爆のように自らの意思とはまったく関係することなく一瞬にして同じ結末になってし まうのはおかしい事で、もちろん絶対にあってはならない事です。

私は、この本を読んで明日が必ず来て生きる事ができるとは限らないことに気がつかされました。あたり前のように明日がやって来る喜び、そしてありがたみについて学ぶことができました。何かを成しとげるために頑張っていた人、日々努力をしていた人、そんな人々の思いも知らずに命を一瞬で消し、普通の日常を奪っていった原爆。消された命の中には、私と同じ年齢の命ももちろん沢山あったと思います。その多くの命が意思とは関係なく消されたものでしょう。今、この平和な時代に生まれて、あたり前のように笑って生きていられることにとても感謝をし、原爆によって命を落とした人達の分まで夢に向かって努力することを大切にしていきたいと私は考えます。これからは、この本を読んで学んだことを、気づくことが出来たこと、考えたことなどを胸に刻み「明日」へとつなげていきたいです。



# 『AIは人類を駆逐するのか?』 から学ぶこれからの生き方

『AIは人類を駆逐するのか?』 太田 裕朗 著 幻冬舎 商船学科1年 村尾 虹大

私はこの本を読んで、改めて自分をしっかりと持つことが重要だと感じた。

今、人間が行う作業は最大限に自動化されている。そして、その技術も高度なものになっていっている。また、それに伴って、AIの自律した機械のような世界になりつつあると筆者は冒頭部分で述べている。私は、すでにこの時点で人間社会の危機を感じた。それは、何かしらの理由でシステムダウンした時に起こる事態が、自動化技術の高度化と普及に伴い悪くなると考えたからだ。ダウンする理由はいくらでもある。サイバーテロや情報戦における工作、不具合、人為的なミス等が挙げられる。それらによりダウンした時に起こる事態とは、自動化されていた作業やそれに頼っていた社会の運営が滞ってしまうことだ。このようなことが危惧されているため、筆者は、いつかAI が AI を管理統括する世界になるという。

また、自動と自律の意味についても述べている。筆者曰く、自動化とは、限定された環境下において一通りの動作を人手無しにできるようにすることを指し、自律とは、自立されそれが確立された思考や判断過程を持つ場合を指すのだという。

私は、この意味付けに非常に共感した。私の出身中学校では、教育方針や学生の目標にも『自立と自律』というくらいには自立と自律を重視していた。ある時、自立だけでなく、なぜ自律が求められるのかについて話を受けたことがある。それを話していたのは私の中学3年の時の学級担任と学年主任の先生なのだが、「自立するのは大人になっていく上で当然だが、今の社会は自律の精神が育っていないと生きていけない」という内容の話をされたことを覚えている。自立はあくまで自己を確立させることにすぎないという意味なのだと思う。一方で自律は、自分を律して行動に移せる力のことを言う。自律は人間社会という集団生活を営む上で必要不可欠な要素だ。しかし、自立していなければ自律の精神を養うことはできないと、私は考える。高専の寮に入ってからは、中学の自立と自律の教えに非常に感謝している。

けれども、高専に入り、今までにない組織集団の数と規模を経験して、組織の中で生きる上では自 律よりも自立していることの方が重要だと感じる場面が多くある。

高専に入学して、早くも半年を過ぎようとしているが、すでに多くの組織集団に所属し運用に何かしらの形で携わっている。学生会や寮生会、部活動、商船高専独特ともいえる海運海技系の組織や団体などがある。実際に社会人として企業に就職してから味わう感覚よりは複雑ではないのかもしれないが、それなりに組織での生き方という術の肝心さを痛感している。それは、他者からの干渉に屈さない芯を持つことだ。時には、人に流されたり、呑み込まれたりするのもありかもしれない。しかし、必ずどこかに自分を持っていなければ、流されたまま、呑み込まれたまま、自分で何かを決めるということができなくなってしまうと私は考える。それこそ、そうなってしまうと、AIに取り込まれる未来になってしまう。筆者は、AIと付き合っていく上で、『覚悟を持たないと技術に引きずられる』と述べている。

AIは、人間が教えれば、それを学習し、結論を出す根拠とする。しかし、教えられないし、学習できないこともあると工学分野の研究で明らかになっている。自律したAIには道徳、倫理、教義を学習させることが重要である。しかし、人間は、無意識に取り込んでいる生物としての人間の進化の歴史すべてを背景に行動を決める。これをAIに学習させることはできないと述べられている。筆者はこのことを、生物次元のことを教えることはできないと言っている。

私がこの件で感じたことは、AIは知能で人間を越せても、生物本能は持たないのだから完全に勝つに至らないのではということだ。しかし、自動化された作業や、高度な自律性を持ったAIによる管理も、人間頼りのところがある。始動の電源を入れる動作や、作業終了のボタンを押すなどといった根本的なところをAIは補いきれない。ダウンしたり故障したりした部分を修理するのも人間だ。結局は、人間の意思をもってして初めて、AIを運用できるのだ。

『理想の未来をAIと共に実現する』。これは、筆者が最後に述べた言葉だ。私たちには、AI関連の技術が進歩するに伴って、より明確な自分の意思主張を持ち、それを伝える力が求められるのだと思う。私は、主張をすべき時に、周囲や職場の上司上官に屈さずに、はっきりと意思表示できる社会人になりたい。





# 思考する

『AIは人類を駆逐するのか?』 太田 裕朗 著 幻冬舎 情報工学科3年 小松 咲絵

AI と人類の関係は、現在注目すべき事柄だと言える。AI の発展により、自動化や効率化が進む一方で、人類の仕事や存在意義が脅かされるのではないかという懸念もある。この本では、AI にできること、AI の利用用途、AI と人類の未来の関係について記されている。

私が AI に抱いていたイメージは「何かよくわからないけど便利そうなもの」というものだった。スマホで何かを検索すれば、AI が勝手に良さそうなものを提案してくる。検索履歴から、私が興味を持ちそうなものを次から次へと提案してくる。しかし、よく考えると検索や閲覧データをもとに、AI が私だけに向けて選び出して提供してくる、というのは何か少し薄気味悪いと感じる。更に言えば、私が興味を持たなそうなものや事の情報は、私が能動的に検索しない限り、出会うことは無いということになる。そう考えると、AI は「何かよくわからないけど便利そうなもの」から「何かよくわからないけど怖いもの」へとイメージが変わってきた。筆者は本著の中で「高度に自律的な AI を "脳"に持つロボットは、新たな "知的生物"にすらなり得るからです。つまり、私たち人類は今、史上初めて、自分たちを上回る性能と可能性を秘めた "知的生物"と共存する時代を迎えようとしています。」と述べている。つまりこれはシンギュラリティの到来を述べていると思われる。AI が人類を上回る、その可能性は本当にあるのだろうか。シンギュラリティに関しては、多くの説があり、必ず起こると断言することはできない。しかし、AI によって社会や働き方が大きく変化することは、避けられないだろうと思う。

AI が人間の仕事を奪う、という話を聞いたことがある。パターン化できるような事務作業や単純作業については、いずれ AI に置き換わっていく可能性が極めて高いと言われている。このため、事務員やレジの店員、電車の運転士などは今までよりも少ない人数で、十分に仕事ができると言われており、実際に自動化が進んでいる。私の知人は、薬剤師を目指していた。しかし、塾や学校の先生から「AI の導入で薬剤師の仕事は減る。今からは薬剤師が余る時代が来る。」と言われ、薬学部への進学を諦めた。AI は、現在その職に就いている人だけでなく、これから仕事に就こうと考えている人の未来にも影響を与えていると言える。

本著ではドローン兵器について語られている。1975年に生物兵器禁止条約を発効したことに触れ、ドローン兵器についても対策が必要だと述べられている。この本が出版された後、2022年2月にロシアとウクライナの戦争がはじまり、著者が心配した通りのことが起こり、現在も続いている。技術の進歩は、ただただ便利なだけではないと言える。

2022年11月にChatGPTが登場した。ChatGPTは膨大な情報を基に学習しているため、あらゆる質問に瞬時に回答することが出来る。さらに、普通の話し言葉でAIとやり取りができるため、あらゆる文章作成が可能となる。例えばこの読書感想文も、AIが得ている膨大な情報を利用して、自動で書いてもらうことも不可能ではない。やりようによっては、私の文章よりももっと知的で、内容の充実した感想文を書いてくれるかも知れない。しかし、AIには薬剤師になりたかった知人は居ないし、戦争を憂う心もない。AIは、ただ文章を作ることは可能だが、そこに心という目に見えないものを加味することはできない。

AI は今後どんなに発達し、自律していっても、心を持つことはできないのだろうか?AI は悩むのだろうか。AI は眠らないが、疲れたり暴走したりしないのだろうか。記憶は得意そうだが、忘却は可能なのだろうか。AI は人類を駆逐するのだろうか。私は思考を巡らせる。AI に駆逐されないためには、どうしたら良いか、AI と共存するためにはどうしたら良いのだろうか。人間は思考する。心をもって思考している。これは思いのほか凄い事ではないのだろうか?私は思考をやめない人間であろうと思う。



# 『「どうせ無理」と思っている君へ』を 読んで

『「どうせ無理」と思っている君へ』 植松 努 著 PHP 研究所 情報工学科 3 年 河村 菜々

『「どうせ無理」と思っている君へ』、如何にも書店の店頭に並んでいそうな自己啓発を促す題名である。十七年の間生きているとこのような本を何度も見かけるのだが、正直言って綺麗事だと私は思った。まあこんな生意気なことを考えている時点で当書を読むべき人間なのだろうが、本を手に取った際にはこの言葉はただのありふれた日本語の羅列としか思えなかったのである。

しかしなぜ読み進める経緯に至ったかというと、この本の著者である植村努に非常に興味があったからである。一度植村努の講演会の動画を拝見したことがあるのだが、物腰柔らかな語りで、非常に説得力のある内容だった。そんな人物が書いた本を読んでみたいと思ったのだ。

当書を読み終えてまず感じたことは、著者の物事の本質を捉え、的確に言葉で表現する能力の高さである。辞書に書いてあるとおりの意味ではなく、自身の人生経験を生かして学んだことや感じたことを含め意味として表現しているのだ。普段おぼろげなその言葉が現実味を帯びて私自身の思考の中に溶け込んでいくような感覚を覚えた。綺麗事だとどこか他人事のように読み進めていた私だったが、このとき初めて、この書がそんな空虚で軽々しいものなどではないと感じた。自分が正しいと感じていたもの、理想だと考えてきたものが否定されていくのだ。体裁を繕っただけの私が考えていた単純な空想ではなく、ある種そこに至るまでの正解が書かれた参考書のような事実だけが記されているのである。

基本的に当書で書かれている著者の「経験」というものは生きていれば誰しも遭遇したことがあるようなありふれたものばかりだ。決して我々が特別だと感じるようなものではない。だからこそ、章ごとに提示されているものの一つ一つに共感でき、比較して具体的な考えが得られるのだ。

当書を紐解いていく上で一つ、印象に残っている部分がある。失敗したり他人に弱みを見せることに羞恥心を抱いていないか、という問いかけである。自身を振り返ってみると、思い当たる節が多々あることに気がついた。友人に何かものを教わるときに、自分がその人より劣っていると思われるのではないかと危惧していたのだ。では、いつからそうなってしまったのか。赤ん坊の頃は立ち上がれないことに羞恥心を抱いていたのだろうか。否、そうではない。いつから他人の評価を気にするようになったのか。私ではたどり着けなかった考えに著者はいとも簡単に踏み込んでいく。そしてこの感情におけるデメリットを、具体的かつ明確に述べている。

結論、著者が重要視しているところはとにかく自分なのだ。基本的でとてもシンプルなことだ。他人の評価ではなく、自分がどう考えているか。自分の本心を見つけるところから始まるのである。だが一ついえるのは、実は私はこれらの考えに対してすべてを肯定しているわけではない、ということである。経験上、他人の評価を重要視して今まで生きてきた私には、ここまで具体的に人生の指標を示されていたとしても、すぐに取り入れることは難しいと感じたのだ。この部分が私が自己啓発が綺麗事だと考えてしまった原因の一つかもしれない。どれだけ正しいことが書かれていたとしても、どれだけ今まで以上に有意義な生き方ができるとしても、自分の中での生き方や考えというものは、すぐには変えることができないのである。この書はあくまでも参考書であり、結局自分の人生を生きるのは自分なのであって、自身が変わらないと意味がない。この本に書いてあることは決して間違いではないのだが、それでも私にとってはあくまでも理想に過ぎなかったのであるただ、この書を手に取ったことが無駄であるとは思わなかった。今すぐには考えを改めることはできないとしても、今までにない新たな発想や思想を得ることができたというのはとても重要なことである。また、これからの人生における選択肢を一つ、増やすことができたと思う。この書に書かれていることが著者の経験における事実だからこそ、一つの正解として、この書で感じたこと、

学んだことが私の中で道しるべとなり、明るく未来を照らしてくれるだろうと考える。





# 新人類との共生

『AIは人類を駆逐するのか?』 太田 裕朗 著 幻冬舎 電子機械工学科2年 古田 飛匠

今回、私が「AI は人類を駆逐するのか?」著者:太田裕朗における論を展開していきたいと思う。 まず私は著者の言う「自動」と「自律」の違いに関しては概ね同意するが、著者の考えに対して異 を唱えたい点がある。それは強い AI (汎用型 AI) は実現不可能という点だ。

なぜ私が強い AI (汎用型 AI) が実現不可能という点に異を唱える、要するに強い AI (汎用型 AI) が実現可能と考える理由は二つほどある。

そもそも現代のハードウェアでは人間の知能、強い AI を実現することは恐らく不可能である。実際に2013年に当時世界で4番目に早いスーパコンピュータであった「京」を使って人間の脳の一秒間の活動を計算するのに約四十分要することからも極めて難解であると考えられる。しかし難解なのは「現代で使われているハードウェア」での話だ。AI はソフトウェアの一種でありソフトウェアの性能はハードウェアに依存することになるのである。したがって人間の脳の活動を再現出来るハードウェアがあれば、強い AI の実現は可能ということだ。では人間の脳の活動を再現出来るハードウェアとは何かというと、それは人間の脳である。つまり我々は人間の脳を模したハードウェアを開発すればよいということである。所謂ボトムアップ型人工知能である。人間の脳を模倣することにより著者のいう原始的な脳を再現できるかという問題の解決にもなりえるのだ。何故なら現代の人間の脳を模倣するだけで進化の大爆発からの五億年の発達史を取り込むことが出来るからである。人間の脳を模したハードウェアを使用することが一つ目の理由である。

二つ目はコンピュータの動作原理をフォン・ノイマン型からより人の脳に近づけることである。 我々人類が知る最も洗練された計算機は人間の脳である。故に私はコンピュータの動作原理すら人 間の脳に近づけることこそが強い AI の実現に最も近いと確信している。

私は著書の中でアメリカの著述業ケヴィン・ケリー氏が否定した人間と同じような存在をもう一つつくる試みはやはりするべきだと考える。人間と同じような思考を持ち、同じような感性をもち、それらを数値化、パラメータ化しそれを外部から変更可能な「知的生物」否「新人類」と呼ぶべきそれは社会に多大な影響を与えるであろうと私は確信している。

AI 研究者のマックス・デグマーク氏の言う倫理をコードとして AI に特に難しいことではなく困難なのは、受け継がれている人間の倫理観に一貫性がなく、内容もたいしたものではなくて、これからより良いものを見つけなければならない。というのならそれらを行えるのは人間であり、人間と同じような思考が出来る AI を使えばその難題も容易に解決できる問題になるのではないか。その時代に沿った倫理観をその都度コードにして AI に学習させるより、人間に倫理観を説くように、AI に倫理観を説いていくことが出来れば、それはきっと人間を模した新な AI「新人類」であれば可能だとは私は考える。

もし「新人類」が実現できたなら、著者の考える未来予想は大きく変わるのではないか。「新人類」は恐らく既存の AI よりさらに人間と身近に、もはや人間との区別が難しくなるほどに近しい存在となるのではないか。あらゆる電子機器にこの「新人類」を搭載することが出来たなら、まるで人が動かしたように自律して動く一つの生物のようになるであろうと考える。ドローンの操作なども実際のドローンパイロットの脳を模したパラメータを入力した「新人類」をつくることで自律した飛行が可能になるであろう。同じように自動運転の問題も解決するではないか。自動車に人間ではないが人間と同じように判断する「新人類」を搭載することによって AI では難解だと考えられていた咄嗟の判断も可能になるのではないか。真にそれはすでに人間が AI を管理して共存する社会などではなく、人間と AI が共生する社会が実現するであろうと確信している。



『明日』 井上 光晴 著 集英社文庫 商船学科1年 小田 芯乃介

五冊ある課題図書の中から、僕がこの本を選んだ理由は、長崎の原爆投下についての物語であるということで、小学生の頃、広島の原爆資料館に行き、自由研究をしたこともあり、何となく原爆について知っているつもりだったため、比較的理解しやすい内容ではないかと思ったからだ。

しかし、大間違いであった。読めない漢字がいくつもあり、戦時中の話はまだまだ知らないことが多く、物語の中の会話は長崎弁で進んでいくため、意味が分からず全然頭に入ってこない。普段ならあきらめてしまうところだが、言葉の読み方や意味を調べ、分からないところは読み返しながら、なんとか読了することができた。

これは長崎に原爆が投下される前日の人々の日常をかいた物語で、投下当日のことは何ひとつ書かれていない。読み終えた時「明日」という題名の意味を理解した。結末を知っている僕は「逃げてくれ」という気持ちで、読み進めた。

物語は八月八日に結婚式を挙げた夫婦と、集まった人々を中心に進められる。戦時中でありながら、人々には日常があり、投下される前日、爆心地を離れる予定が変更になった人、用事で爆心地にやってくる予定の人、様々だ。

登場人物の会話から当時の生活がどのようなものだったのかも分かった。物資が不足していたことは知っていたが、米の代わりにいかの塩辛が配給されたことには驚いた。

特に印象に残ったのは、結婚式でのシーンで、当時食料が不足する中、華やかではないが、精一杯整えられた料理に対して妬みの目が向けられたところだ。

人々の会話から垣間見える根底に渦巻く妬みの感情は、戦時中の人々を苦しめていたのではないかと思った。

なぜあの人は兵隊にとられないのか、なぜあの家は手に入らないものが手に入るのか。今のように情報を得る手段も少ないため、今以上にデマのようなものも頻繁に流れただろうし、人々は日々不安な生活を送っていたのだろう。

一章、二章と順に読み進めていき、最終章は、第0章となっており、僕は「とうとうその日なのか」と息を飲んだ。

原爆投下の時間が迫る中、八月九日、四時十七分、難産の末に、男の赤ちゃんが産まれたところで物語は終わる、

この章は、壮絶な出産のシーンにも関わらず、なぜか他の章と比べて穏やかな印象を感じた。だから、終わるな、まだ続いてほしいと思った。時間が迫っている。

僕はこの物語の結末を知っている。けれどこの後、長崎に原爆が落ちることを物語の中の人々は 誰も知らない。

昔も今も、人々は明日が来ることを当たり前に思い、生きている。

当時物がなく、豊かでない生活の中で、絶望することなく生きてきた人々を、ひとつの爆弾が奪い、その後も長い間人々を苦しめた。

物語には書かれていないし、そう思いたくないが、0章で生まれた赤ちゃんとその母親もきっと 亡くなってしまったのだろう。

あえて八月九日の早朝で物語を終え、新婚夫婦、刑務所に収監された夫に接見する妻。産まれた ばかりの赤ちゃんとその母親などの登場人物の日常を淡々と語りながら、ここまで原爆の恐ろしさ を感じさせられる本を初めて読んで、僕は何とも言葉に表せない気持ちになった。登場人物それぞ れの「明日」がどうなったのかということに一切触れていないところにとても重みを感じた。

それでも僕は、自分に明日があることを疑っていない。

僕の曽祖父は広島で被爆し、命は助かったが、長い間、高熱に苦しんだと聞いた。爆心地から近い場所で被爆し、その光景がその後何年も夢に出てうなされたらしい。原爆のことは思い出したくないと話したがらないまま、曽祖父は亡くなってしまったが、若い人達に話しておかないといけないと常々言っていたらしい。

亡くなった人はもちろん、生き残った人もずっと癒えない傷を背負った。

大量殺戮兵器が悪くて、普通の兵器が良いわけではないが、人類歴史上、二度だけ使用された「原子爆弾」

こんな兵器はもう二度と使用されてはいけない。

# 第3回読書ラリー優秀者発表

良書に親しみ教養を高めることや図書館利用を促進することを目的として、昨年度に引き続き、令和5年12月4日(月)~令和6年1月15日(月)の期間で、第3回読書ラリーを開催しました。

多くの本科生・専攻科生に参加いただき、上位3名を最優秀賞、4~10位を優秀者 として表彰し、賞状及び副賞を贈呈しました。

### 最優秀賞

電子機械工学科1年 森松 佑月

商船学科1年 佐上 茉香太

商船学科1年 長島 奏多

## 優秀賞

商船学科1年 草野 彗莉

情報工学科 5 年 村末 裕音

商船学科3年 森松 豊

商船学科1年 江里口 葉月

情報工学科1年 藏谷 陽和

電子機械工学科2年 板垣 皓祐

商船学科1年 山本 楓矢

商船学科3年 本木 貴久



読書ラリーの表彰

#### 教員推薦図書

#### トコトンやさしい自動車エンジンの本

原田 了 著 目刊工業新聞社

商船学科 寺田 将也

エンジンの基本原理や異なるエンジンタイプの特性、エンジンを取り巻く補器類、環境性能への対応など、幅広い内容を網羅しており、これらの知識は船舶エンジンの勉強にも応用可能です。自動車エンジンと船舶エンジンは運用環境や規模が異なるものの、基本的な動作原理は共通しています。

特に、環境にやさしいエンジン技術の章は、船舶エンジンの排出ガス規制への対応に関する最新の取り組みを理解するための基礎知識を学ぶことができます。船舶エンジン分野でも、環境規制の厳格化に伴い、有害排気物質を低減させる技術が求められており、自動車エンジンでの進歩は船舶エンジン技術にも影響を及ぼしています。

この書籍は、自動車エンジンに焦点を当てていますが、その内容は船舶エンジンを 勉強している学生にとっても、基礎知識の構築や専門的な学習への足掛かりとして 極めて有益です。自動車エンジンの技術的なことを学ぶことで、船舶エンジンに関 する技術や概念の理解が深まり、海上技術者になったときに、役立つ基礎知識が付 くはずです。





学科推薦図書コーナー

#### 教員推薦図書

#### 紛争地の看護師

白川優子著小学館一般科目吉積侑莉

紛争は、宗教や文化の違い、民族間の争い、集団心理や環境などのさまざまな要素が複雑に絡み合って起こります。また、国境が不明確なために起こる紛争や、政権に対する不満を抱いた人々が反対運動を起こし、それが紛争の引き金となることもあります。みなさんの記憶に新しいのは 2022 年から現在も続いているウクライナ紛争ではないでしょうか。

本書は、難民キャンプや紛争地で医療を提供する「国境なき医師団」の看護師としてイラク、シリア、パレスチナなどに8年間で17回派遣された白川氏の実体験が丁寧につづられています。「(紛争地に行くのは)あなたでなくてもよい」、「日本にも医療を必要としている人がいる」このようなことを言われると記されていますが、自分の大切な人が同じ立場になったら私も思わず言ってしまうでしょう。安全が必ずしも保障されない地で「私の看護師スキルが役に立つかもしれない」と強い信念を持って、医療活動を必死で続ける白川氏の姿勢には感銘を受けました。一方で、「銃ではなくペンを持ちたい」と願う若者が戦っていることや、目覚めて手足がなくなっていることに気づくであろう子どもがいる状況には胸が痛くなると同時に、日本の「平和」のありがたさを強く感じました。

いつの日か、紛争で亡くなる人がいなくなることを願い、世界のどこかで起きている現実を知ってください。そして、本書を読みながら自分にできることを考えてみてください。

# ブックハンティングに参加して

普段は行けないような大きな書店に行けて 楽しかったです。様々な本がありどんな本を 選ぶか悩みました。まだ、専門書は分からな いので小説を多く選びました。読みたくなる 本がたくさんありました。また機会があれば 参加したいです。

商船学科1年 草野 慧莉

今回、二回目の参加となったのですが、『エレベータの場所がわからない』といった問題 以外、特に目立ったハプニングが起きずに終えられたのでよかったなと思いました。

大島には大きな書店がないので、丸善のような大きな書店に行ける機会が実家に帰省したタイミングしかないので、僕自身としては大変うれしく思いました。

無論、電子書籍やAmazon等の通販で購入することもできますが、紙の書籍を手に取って中身を見て購入することが大事だなと思いました。

商船学科2年 中本 滉大

ブックハンティングでは、他の学年他クラスの方と実施するので他の学科の専門書や先輩らが勉強している専門書のことが知れるので実に有意義な時間でした。

最近私は、ギターを始めたのでギターを始めた楽器の本が案外多くて楽しかったです。

また、あまりこの学校では他の学科との交流の機会も無いと思うので他の学科の方との 会話や新しい本との出会いがあってとてもよ かったです。

商船学科3年 谷口 楓真

西広島に行くのは初めてだったから、集合 場所まで先生について行きました。

いろんな本があって、おもしろかったで す。

本を選ぶのに悩んだけど、なんとか何冊か 選ぶことができました。それでも一万円には 届かなくて、あせったけど、同じ学年の人 が、本をたくさん選んでくれたおかげで助か りました。普段本を読まないから、いろんな 本に出会えて良い機会でした。

電子機械工学科1年 寺下 輝太郎

私は、今回初めてブックハンティングに参加しました。

はじめはどんなことをするのかわからず少し面倒だと思っていましたが、実際に行ってみると普段話すことのない他の科の人と話すことができたり、おすすめの本を教えあえたりと、とても良い交流の場となりました。このような機会はあまりないと思うのでまた参加したいと思いました。

電子機械工学科2年 小田切 楓



今回がブックハンティング初参加で、参加 前は正直すこし面倒だと思っていましたが、 いざ書店に行き本を選ぶ時になると様々な種 類の本がありどのような本を選ぶかと考える ことが面白く、また、ブックハンティングの 予算で取りたい資格の参考書や趣味の本を買 えることを知り驚きました。

それ以外にも普段話さない科の人や他学年 との関りもあり、機会があればまた参加した いと思いました。

電子機械工学科3年 小野坂 武

今回、ブックハンティングを行った書店は、専門書を多く取り扱っていたので、unityや blender を含む個人的に欲しかった専門的な書籍をたくさん購入することができました。

私が、ブックハンティングに参加するのも かれこれ3回目で、はじめて参加したときに 比べて、今回はかなり躊躇なく本を購入して いた気がします。

毎回違ったしい出会いがあるので、とても 楽しいですし今回も参加することができて、 本当に良かったと思っています。

次のブッハンティングにもぜひ参加してみたいです。

情報工学科4年 吉野 桜花



ブックハンティングの様子

私は、3回目のブックハンティングでした。

今回から別の書店となったこと、また公共 交通機関が苦手なことから不安でしたが、先 生について行って無事に到着できました。

大きなビルに2フロアもある巨大な書店で、想像以上に広くて時間が足りず、また本を事前に決めていなかったため、興味のあるジャンルの専門的な本ばかりを選んでしまいました。

後悔はしていません。

電子機械工学科4年 山﨑 樟太

友人の代理としてでしたが、初めてブック ハンティングに参加させていただきました。 私は本が大好きなので、今回の書店内を歩い ている時間は、「世間という砂漠で疲れた後の オアシスでの休憩」と言っても過言ではあり ませんでした。

今回はブックハンティングということで、いつものように一人で自分が読みたい本を選ぶ時とは違い、複数人で、他の学生にもぜひ読んでもらいたい本を選びましたので、私にとっては新鮮な時間でした。普段はあまり接点のない他学科の同級生や後輩とコミュニケーションを取ったり、教官と本の話をしたりと、一人の時には味わえない楽しみが経験できました。

商船学科5年 山根 大和



私は今回のブックハンティングという機会を最大限楽しむことができたと思います。私は大抵本を読む時は図書室から借りることが多いので、実際に本屋に出向いて本を探すことがとても新鮮に感じました。また、本を選ぶ際も専門書は学校の図書館にすでに多くあるので、何を選べば良いか難しいところはありましたが、最終的には先生のアドバイス通り自分の興味のあるものを中心に本を選びました。自分が選んだ本が学校の本棚に並ぶのがとても楽しみです。そして、このブックハンティングに参加することで本に対しての興味がより一層強くなり、自分で選んだ本も図書室で見かけたら借りようと思います。

電子機械工学科5年 大道 敬久

高専生活最後の年となった今年、初めてブックハンティングに参加した。今までは図書館で見つけた本を読むだけで満足していたが、どうしても欲しかった専門書があり、ほかにも実用的な本との出会いがあると思い、参加を決意した。今回お世話になった丸善広島店は今まで見たことないほどたくさんの本があり、その中からほしい本や気になる本を探すのは大変ではあったがとても貴重な体験だった。就職後も本を読む習慣を続けていきたい。

情報工学科5年 村末 裕音



ブックハンティング参加者



#### 図書館と出会う読書活動「ライぶらり」実践サポート校の取組

今年度、7月20日、11月30日、1月18日の3回にわたり、山口県立山口図書館から外部講師をお迎えし、本校1年生を対象に、読書活動「ライぶらり」を行いました。

「ライぶらり」は、平成30年(2018)に山口県立山口図書館内の山口県子ども読書支援 センターにおいて考案された、図書館内の本を選び、なぜその本を選んだのかを紹介し、本 をとおしての交流を行う全員参加型の読書活動です。

活動の基本的な流れは次のとおりです。

- ①時間、冊数、テーマを決め、図書館を散策し、未読のおもしろそうな本を探す。
- ②4人程度のグループで順番に「本を選んだ理由」を話す。
- ③グループの学生が選んだ本を手に取り、グループで交流する。
- ④興味を持った本は貸出手続きをし、借りない本は元の場所に戻す。

今年度、本校は「ライぶらり」実践サポート校の一つに認定され、学生の手に取る本の幅を広げ、自主的な読書活動を促すとともに、主体的な図書館の活用を促進する有意義な機会になりました。







### 図書館利用状況

令和5年12月31日現在

年度別入館者数・貸出人数・貸出冊数



	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
入館者数	3,805	4,740	6,847	6,864	7,557
貸出人数	818	1,115	1,443	1,140	1,059
貸出冊数	1,777	2,202	3,028	2,221	3,020

令和元年度は図書館改修工事のため 6 月から臨時図書室を開設、令和 2 年度は新型コロナウイルス感染対策のため閉寮・時間外閉館のため入館者・貸出実績ともに減少

令和5年度学年別利用状況



	1年	2 年	3 年	4年	5年	専攻科
貸出人数	216	58	113	143	167	48
貸出冊数	1,147	123	288	274	422	102



大島商船高等専門学校図書館だより 第32号

2024年(令和6年)3月18日発行

編集者:大島商船高等専門学校図書館運営委員会

発行者:独立行政法人国立高等専門学校機構

大島商船高等専門学校

〒742-2193 山口県大島郡周防大島町大字小松 1091 番地 1

電話 (0820) 74-5454 (図書係)

https://www.oshima-k.ac.jp/campus/facility/library/